

## 東沙島への日本人の進出と西澤島事件

平岡昭利

下関市立大学 経済学部

明治期、一獲千金をもくろみ、羽毛を獲得するためアホウドリなどの鳥類を追った日本人の行動は、太平洋の島々へと拡大していったが、本研究は南シナ海の東沙（プラタス）島への日本人の進出を考察したものである。東沙島へは1901年にアホウドリを求めて玉置半右衛門や水谷新六が探検を行ったが、同島にはアホウドリは生息せず、玉置はすぐに断念し、水谷は目的をカツオドリに代えて進出したが失敗した。次に進出した西澤吉治は、当初、鳥類の捕獲を企図したが、鳥糞（グアノ）・リン鉱採取も視野に入れ、大量の労働者を導入した。無人島が一躍、企業（会社）島「西澤島」に変貌し、無人島進出の行為目的が鳥類から鳥糞・リン鉱採取に変わるのである。また、西澤の事業着手後、領土問題化した西澤島事件は、対日ボイコット運動などの中国のナショナリズムの高揚のなかで起こったもので、日本政府はこれらの運動により大きな痛手を受けており、本研究では、同事件について、日本が西澤島を清国領として認め、清国が西澤の資産を買収することで決着したことにも言及した。

**キーワード：**東沙島、プラタス島、西澤島、アホウドリ、鳥糞（グアノ）・リン鉱

### I はじめに

明治期、羽毛という一攫千金の商品を獲得するため、アホウドリ<sup>1)</sup>などの鳥類を追った日本人の行動は留まるところを知らず、その行動範囲は日本近海から太平洋の島嶼へと拡大を続けた。これを筆者は「バード・ラッシュ」と定義し<sup>2)</sup>、鳥類を求めた行動（行為目的）の結果が「帝国」日本の領域拡大につながったことなどを明らかにしてきた（平岡，2003；2005a；2008b）。

これら日本人の行動は、1897（明治30）年頃には東は太平洋のミッドウェー諸島を含む北西ハワイ諸島全域に達し、多くの日本人が無人島で鳥類の捕獲作業に従事した（平岡，2006；2007；2008a）。その後、新たな無人島を目指した人々は、太平洋南西海域、南シナ海の島嶼にまで進出した（平岡，2010）。

本研究は、日本人の鳥類を追った行動のうち、中国南部、南シナ海の東沙（プラタス）島<sup>3)</sup>への日本人の進出を取り上げる。これは日本人の進出の行為目的が、アホウドリから鳥糞（グアノ）・リ

ン鉱へと変化した事例であり、無人島の東沙島から、企業（会社）島の西澤島へと展開した実態を検討する。さらに勃発した中国の対日ボイコット運動のなかで領土問題化した西澤島事件についても明らかにする。

### II 東沙（プラタス）島への日本人の進出

東沙島は南シナ海の北部、香港の南東330kmにあり、台湾島との間に位置する（図1）。環礁の小さな島（1.74km<sup>2</sup>）でプラタス（Pratas）島とも呼ばれ、現在は台湾（中華民国）の支配下にある。中国南部の航路沿いにあることから、古くから認識された島であったが、環礁で標高が低いため恒常的に風波が襲い居住条件が悪く、長く無人島の状態に置かれてきた。

#### 1. 東沙島への日本人の漂流と進出

東沙島と日本人の関わりは、明治維新の直前、1866（慶応2）年に八丈島の島民34名が、同島に漂着した事件が記録上その端緒となる（松永，1995）。同年9月8日、品川を出港した幕府御用船

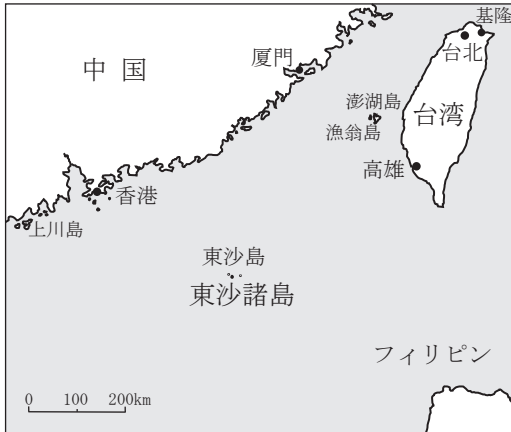


図1 東沙島の位置

は、伊豆大島を過ぎたあたりで台風に遭遇し、船はそのまま西へと流され続け遠く離れた東沙島で大破した。乗組員34名は島に上陸し、たまたま同島に出漁中の中国漁船に救助され、香港に運ばれ香港政庁の保護を受けた。翌1867年になってイギリス駐日全権公使のパークスは、幕府にこれらの漂流者を香港から送還することを伝え、1月23日、イギリス商船に乗せられた八丈島民34名は無事横浜に着いた(東京都八丈島, 1973)。幕府はパークスに謝意を表し、香港総督に謝品を送付した。同年10月大政奉還が行われ、この事件は幕末最後の漂流事件となった。

この東沙島漂流事件から35年後の1901(明治34)年、漂流の記憶が八丈島民に残っているなかで、鳥島のアホウドリの捕獲で莫大な利益を上げ、1900年に南大東島の開拓に着手した玉置半右衛門が、さらなる海鳥生息地の島嶼を発見しようと無人島探検に触手を伸ばした1つが、この東沙島であった。漂流事件当時、20代の若い漂流者も多く、同島の情報が玉置に伝わっていたことは間違いないであろう。

玉置は同年11月に東沙島へ探検隊を派遣した。この時の報告によれば、

「…本島は馬蹄形の礁脈とその入り口にある一

個の島嶼より形成せられ、その礁脈は周囲約四十里あり、礁内一面の内海を為せるに拘はらずプラタス本島とも称すべき一島嶼は、周囲約一里許りの小島にして俗にタバノ木<sup>4)</sup>と称する灌木繁茂せるのみにて、その他に一の樹木なく、又島内に棲息せる鳥は信天翁にあらずしてオサ鳥なり」とあり、進出(行為)目的であったアホウドリは生息しておらず、鳥類の種類も少なかった。このため翌1902年には東京府知事宛に以下の文書を提出した。

フラタス  
不臘達斯島 渡航ニ関スル申報書<sup>5)</sup>

私儀

客年十一月手船第一回洋丸ヲ以テ 右不臘達斯島渡航取調べ候モ 該島ハ僅ニ礁脈ノ島形ヲナセルモノニ過ギス 且ツ島中 一ノ産出物モ無之次第ニテ到底移住開拓致シ難ク候ヲ以テ同島渡航ハ其後中止仕候 右申報候也

明治三十五年八月二十七日

東京市京橋区山下町二十番地

玉置 半右衛門

東京府知事 男爵 千家尊福 殿

と「一ノ産物モ無之」として東沙島への進出を断念している。

この玉置の派遣した東沙島の探検隊と、まさに同時期に、南鳥島を開拓し小笠原を拠点に活動していた水谷新六も、1901年10月1日、帆船の矢丸で18名の乗組員と共に東沙島に向けて品川を出港した。55日後の11月23日東沙島に着き、島の西側から上陸している。島内には小屋や祠があり中国漁民の出漁が伺え、近くに1隻の中国漁船らしき船を確認している。島の近海はイカや鯨などの魚類が豊富で海亀も多く、鳥類ではカツオドリ(オサドリ)<sup>6)</sup>が生息していたが、捕獲目的のアホウドリはいなかった。

このため、水谷も玉置の派遣した探検隊と同様、すぐに東沙島を引き揚げ、バタン諸島などを

表1 東沙島（プラタス島・西澤島）年表

年	事 項
1866年（慶応2）	八丈島の島民34名が漂着（9月）、中国漁船に救助され香港へ移送される。
1867年（慶応3）	香港政庁、イギリス商船で漂着民を日本に送還（1月）、幕府が謝意を表明する。
1901年（明治34）	アホウドリの捕獲を目的に玉置半右衛門が探検船を派遣、水谷新六も帆船「的矢丸」で探検を行う（11月）。
1907年（明治40）	水谷新六がカツオドリの捕獲を目的に再度、同島への進出を図るが遭難する。 西澤吉治が汽船「四国丸」で同島へ進出、西澤島と命名し、グアノや貝類などの採取を開始した（8月）。
1908年（明治41）	第二辰丸事件が発生（2月）、中国南部を中心に対日ボイコット運動が拡大。 台湾総督府、プラタス島の調査を実施、4名の技師を同島に派遣した（7月）。
1909年（明治42）	西澤島事件が発生（3月）、領土問題として大きく新聞が報道。 日清の交渉継続、西澤島の資産評価のため軍艦「明石」「音羽」を派遣（7月）、清国の領有を認め、同国による西澤島の資産買収で合意した（10月）。

（著者作成）

經由して翌1902年2月4日に香港に着いている。アホウドリの羽毛採取を目的として、水谷に東沙島探検を持ちかけた岡山重次郎は、その責任を取って台湾島北部の無人島彭佳嶼と棉花嶼の借地権を水谷に譲渡したという（岡山、1910）。

以上のように、この時期、玉置も水谷もカツオドリの採取が容易にも関わらず、アホウドリ以外はまったく眼中になかった。また、鳥糞（グアノ）やリン鉱などの地下資源は、まだ認識していない。すなわち1907（明治40）年前後までの日本人の太平洋の無人島への進出は、高価な羽毛が大量に取れるアホウドリが第1の目的であったと言える<sup>7)</sup>。

## 2. 水谷新六の再渡航と遭難

東沙島上陸から6年後の1907年水谷新六は、再度、同島への進出を計画した<sup>8)</sup>。前回の渡航目的はアホウドリの捕獲であったが、今回は、その時に見落としたカツオドリであった。カツオドリは、別称、オサドリやガネットとも呼ばれ、アホウドリほど大きくはないが、それでも全長70cm、両羽を伸ばせば150cmに達するほどの大型の鳥である。アホウドリは、その数が激減したことや1906年に保護鳥に指定されたことにより、徐々に捕獲

が困難となり、代わってカツオドリや捕獲が容易なオオミズナギドリ<sup>9)</sup>が狙われ乱獲された。1907年3月、水谷新六は台湾、基隆に渡航し東沙島へ出港したが、暴風のため遭難、3ヵ月後に九死に一生を得て救助され、台湾総督府に陳述書や始末書を提出している。これらを通して彼の行動を追ってみる<sup>10)</sup>。

台湾に渡った水谷新六は、基隆在住の西村竹蔵から東沙島の開拓資金を借用し、同島の経営を西村との共同とした。1907年3月3日、水谷は基隆を出港、澎湖島に向かい、ここでジャンク船（約77石積）を購入し、この船を台湾丸と命名、開拓に使用することにした。4月2日、同船に18名が乗り込み、澎湖島の南、海鳥の捕獲が行われていた猫島<sup>11)</sup>に向かったが、まもなく天候が悪化し台湾丸は近くの漁翁島に避難した。4月5日になり、同島を出港し、再度猫島へと航行したが、またしても風波が強くなり、急きょ進路を東沙島に変更したものの船体を破損、操船不能となり、そのまま流され広東省上川島に漂着した。その後、ようやく香港に辿り着いたのが出港から48日後の4月20日であった。

漂流を続けた台湾丸の船体はボロボロに破損しており、水谷の東沙島開拓は、当初より苦難の連



図2 西上空から見た東沙島（白い直線のラインが滑走路）

（朝日新聞社提供）

続であった。だが、水谷は開拓を諦めず、自力航行が不能となった台湾丸を使用して東沙島行きを決行、香港から神戸行きの汽船盛運丸に東沙島まで台湾丸の曳航を依頼し、5月19日に香港を出港した。水谷の執念なのか、羽毛採取という一獲千金の夢を追った無謀とも言えるべき行動であった。3日後の5月21日、盛運丸に曳航された台湾丸は東沙島に着いた。水谷の他2名が上陸し、6名は伝馬船を使用して台湾丸を湾内に引き入れる作業を行っていた。しかし、天候が急変し風波のため台湾丸のコントロールが出来ず、すでに神戸に向けて出港しつつあった盛運丸に助けを求めたが無駄であった。翌朝、台湾丸を探したものの見つからず、9名が同島に取り残され、置き去りになった絶望感の中で、いつ来るともわからない救助を待つことになった。

島には、水谷が6年前に上陸したときと同じ小屋があった。9名はその小屋に避難しようとしたが、そこには2人の中国人が居住していた。産卵期のタイマイ捕獲のために香港と厦門からやってきた漁民で1～2ヵ月間滞在するだけと言い、彼らの所持していた食糧も少なく米2斗だけであった。米を分けてもらうこともできず、長く小屋に滞在できないと考え3日後には少し離れたところに小屋を建てて移った。また、地面を2メートル

掘り下げて、塩分を含むが、どうにか飲める水を手に入れた。食料はカツオドリを捕獲して食べていたものの下痢を起こした。魚を捕ろうと中国人から4～5本の釣針をもらったが、その釣針も海辺で失ってしまった。その後はカツオドリの雛と小魚、桑の若葉を入れて炊いたものを常食とした。

遭難から2週間過ぎても救助船は来なかった。栄養不足のため身体は衰え、全員が半病人のようになった。その後、湾のリーフ付近に4～5隻の小船を見たので盛んに烽火を上げて助けを求めたものの、船は無視して立ち去ってしまった。救助の見込みもなく、死を待つばかりかと失望していた遭難から21日目の6月11日、西方より煙を上げる汽船を認め、必死に烽火を上げ救助を求めた。船は日章旗を掲げていたので救助船と判明し、全員が伝馬船に乗り込み必死で汽船まで漕いだ。汽船は、台湾総督府の命を受けた大阪商船の福州丸であった。同船の到着が、あと10日遅れたならば乗組員の過半は死亡していたと水谷は感じた。救助された9名は船中で手厚い待遇を受け、翌12日には香港に着いた。その後、水谷は台湾に行き、総督府から遭難に関しての事情を聴取された。9名の出身地は小笠原島3名、八丈島2名と東京市、静岡県、新潟県が、それぞれ1名と水谷であった。水谷は三重県桑名市の出身であるが、小笠原島、



南鳥島、マリアナ諸島などで活動していた。行方不明の台湾丸は、台湾南部の高雄付近で破綻したものの全員が救助されていた。

以上が遭難の顛末であるが、水谷らは、長期間、東沙島で漂流生活を送ったため島の実態を把握している。陳述によると東沙島は馬蹄形のサンゴ礁島で樹木や雑草も生え、特に桑が多い。漁業資源として鯛、鰹、鰯、飛魚のほか、真珠貝やタイマイも豊富である。タイマイが産卵のために島に上陸する季節には、中国南部の漁民もやってくる。大きなタイマイは、1匹で40～50円になるものもある。鳥類資源としては多くのカツオドリが生息し、産卵期には簡単に捕獲することができ、その羽毛はフランスに輸出すれば1羽14～15銭になる。また、鳥糞も広く見られると述べている。

以上のように、水谷による東沙島開拓は手をつけないまま失敗に終わった。操船不能な船を曳航してまで東沙島に向かった無謀さから、水谷の執念が伺われるが、それだけ羽毛の利益が大きかったと言える。撲殺によって簡単に採取できる羽毛は、重い鳥糞やリン鉱と違い小船でも簡単に持ち帰ることができるのである。すなわち資本がそれほどなくても巨利を手にすることができるのであり、まさに水谷の行動は、鳥類捕獲を目的とした行動であった（東京肥料史刊行会、1945）。

### 3. 西澤吉治の東沙島進出

#### －行動背景から開拓着手へ

ベストセラー作家の司馬遼太郎は、長編歴史小説『坂の上の雲』を刊行後、死後の正岡子規に関わる人々を描いた『ひとびとの登音』を執筆したが、主要な登場人物の1人に「タカジ」ことプロレタリア文学の詩人で活動家でもある西澤隆二がいる。この隆二の父親が、東沙島に進出した西澤吉治であり小説でも紹介されている（司馬、1983）。

西澤吉治は1872年（明治5）に福井県鯖江市に

生まれ、1881年に一家で上京したが、早くに父を亡くし、初代地質調査所長の和田維四郎に預けられ、同調査所の給仕をしながら夜学に通った<sup>12)</sup>。後にラサ島（沖大東島）の経営に乗り出す恒藤規隆も、この調査所の技師であった。その後、西澤は伊豆諸島の開発に従事するが、1892年頃に結核に侵され、八丈島で療養生活を送った<sup>13)</sup>。当時の八丈島は、小笠原島など島外への出稼ぎが盛んであり、玉置半右衛門が鳥島で行っていたアホウドリの捕獲事業の絶頂期でもあった。当然、西澤は、この状況を認識していたし玉置とも関わりがあったと考えられる。

八丈島での療養生活を終えた西澤は、1894年の日清戦争勃発から近衛師団の酒保商人として中国に渡り、さらに台湾へと従軍した。この間の事情は不明であるが、戦後に基隆の曾仔寮街で商店を開いた。基隆での西澤は回船業を営み、1907（明治40）年頃には西澤汽船を設立、日本郵船や商船三井を相手にダンピングで対抗するなど、若くして有力な実業家となっていた（山下、1939）。

1907年8月8日、西澤は遭難した水谷が東沙島より台湾に引き上げてきたのと入れ代わるように、汽船四国丸で東沙島に向けて基隆を出港した<sup>14)</sup>。その目的は、当初、アホウドリの捕獲であったが（東京地学協会、1907a）、鳥糞（グアノ）・リン鉱や高瀬貝も視野に入れていた。高瀬貝については、日本国内で貝ボタンの製造が盛んになったため品薄状態が続き高値で取引されていた（片岡、1991）。これらの輸送には1,400トン級の汽船を使用し、労働者も当初から八丈島民を105名も雇用しており、水谷の鳥類捕獲の場当たりの進出とは異なっていた。

西澤は基隆を出港後、水谷が取った航路と同じく澎湖島に寄港し、4日後の12日には東沙島に着いた。すぐに建設資材や食料を陸揚げして小屋を建設、井戸の掘削にも着手した。小高い所に日章

旗を掲げ、この島を「西澤島」と命名している。

その後、西澤は栈橋や建設用レールなどの資材を西澤島（東沙島）に輸送し、出稼労働者が約1ヵ月間に採取した高瀬貝14万斤、グアノ65万トンのほか、タイマイや白蝶貝を台湾に輸送した。心配された風土病は見られなかったものの、掘削した井戸は飲料水として適さず、水は天水に依存し、また野菜の生育も悪かった。居住条件は劣悪であったものの、西澤による事業の拡大は続き、当初だけで投下資本は25万円に達した。軽便鉄道が完成、事務所、宿舍、倉庫など十数棟が続々と建設された。しかし生産活動は略奪的であり、どう見ても過剰投資の感は否めなかった。出稼労働者は、当初八丈島からであったが、その後、沖縄や台湾、福建からも募集した。宮古諸島の池間島からも出稼に行っている（野口、1972）。生産の増加に伴い輸送力を拡大するため、3隻体制であった汽船を5隻に増やし、西澤島－高雄－基隆－内地を結び月に1～2回の割合で物資を輸送した<sup>15)</sup>。

このように、時折、中国南部の漁民が上陸するに過ぎなかった小さな無人島は、略奪的な生産活動が開始されると、数百人の労働者が居住する西澤島に変貌した。大海原の孤島生活で、労働者の風紀が乱れることを恐れた西澤は、十ヵ条にわたる島の憲法というべき規則を設け（菜花、1909）、さらに監督する事務所は、規則命令を労働者に順守させるため厳しい罰金制度を課した。リン鉱分析のために島に滞在した村木次郎は、これを「島治法」と称し、労働者の生活全体をこの法で統治し、罰金を積み立てたお金は、在島中に病気に罹った者や死亡した者に与えることとなっていたが、実際、その事実はないとした。「個人経営、且つ私法専制的の島治法は、全然 監獄同様、否寧ろより以上の酷政を以て取締りを為す」と指摘している（村瀬、1909）。

なお、労働者への賃金の支払いは、カツオドリが飛び交う風景が描かれた私製紙幣「西澤島通用引換券」で行われ、表に「本券に依り西澤島内各販売店に於て、必要の物品と引換購入することを得るものなり。表面の金額正に相預り、本券引換に基隆 西澤商店にて現金相渡可申候也」と印刷されていた（山下、1940）。この引換券は極めて精巧に作られ、10円、5円、1円の3種類は台湾銀行発行の10円紙幣とほぼ同じ大きさであった。退島時に現金化（交換）するこのようなシステムは、企業島、例えば大東島など経営者の支配の強い島嶼で行われ<sup>16)</sup>、東沙島もその性格を帯びていたと言える。

### Ⅲ 台湾総督府による「プラタス島」の調査

防衛省防衛研究所所蔵の文書に「海軍公文備考」がある。その1908（明治41）年の雑件の中に「プラタス島視察報告」が収録されている（台湾総督府、1908）。この報告は、台湾総督府殖産局長の命を受けてプラタス（東沙）島に4名の技師を派遣して作成されたもので、調査期間は2週間程度と察せられる。報告書は2部からなり、1部の「不臘達斯島視察報文」は、同島の位置から始まり、沿革、交通、地形、鉱物、リン鉱など地誌的事項の報告であり、2部の「プラタス島燐鉱調査報告」は、文字通りリン鉱についての報告である。

この調査についての台湾総督府の意図は明らかではないが、西澤の開拓については一部の新聞が着手当時から失敗したのではと報道しており<sup>17)</sup>、総督府自らが同島の実態を把握しておきかったことは間違いないであろう。報告書は7月22日に殖産局長宛に提出されたが、海軍もこの調査に注目しており、翌8月19日には総督府海軍参謀長が海軍大臣宛に報告書と2枚の地図、さらにその3日後には8枚の写真を提出している。

なお、報告書のタイトルは東沙島でも西澤島で

もなく、英文表記に漢字を当てはめ「不臘達斯島」としている。西澤が同島に上陸して1年、新聞各紙が西澤島として報道しているにもかかわらず、台湾総督府は当初より領有に関して慎重であった。これについて報告書の交通の項目には「本島ハ絶海ノ孤島ニシテ其所管モ未ダ確定セザルヲ以テ…」と領有未確定の記述もある。

以下「不臘達斯島視察報文」から島の概況や開拓の様子などを点描する。

地形：馬蹄形状に連なるプラタス島の環礁のうち、西澤の開拓した島は西にある。東西に長く南北に短い蟹鉗状の砂丘の島であり、西には大きな鹹湖が広がり、北西の部分で海に通じている(図3,4)。湖底は浅く、最も深い部分でもわずかに1.8mにすぎない。陸地は東部が高く最高点で9mあり、この地域を元濱と称している。標高は西に行くほど低くなり、鹹湖の南北は半島状の砂浜であり、北島濱、南島濱と称しカツオドリ(オサドリ)が群棲している。島の周囲の環礁は、通常はその一部しか海上に露呈しないが、干潮時には総延長約67kmの馬蹄状の巨大な環礁が現れる。礁の幅は最も広いところで約36m、水深は0.9~5mに過ぎないため船舶にとって非常に危険な水域であり座礁や沈没した船も多い。

海産物：プラタス島は水深が浅く、貝類の種類が豊富で高瀬貝、蝶貝、螺貝、広瀬貝、夜光貝などが採取され、この他にタイマイも捕獲された。ただ、高瀬貝を除けば量的には少ない。高瀬貝の採取は3月から10月まで行われ、1日3人乗りの船で約500個、4人乗りでは約700個が取れた。貝は貝肉と貝殻に分離し、貝肉は乾燥させ100斤を20円で売却、年間14~15万斤を生産した。貝殻は神戸の東洋鉦製造所に販売され、貝殻100斤に付10円50銭の利益を得た。この他、蝶貝やタイマイも捕獲されたが量的には少なく、蝶貝は100斤で27円の利益となり、タイマイは4月~10月まで捕獲

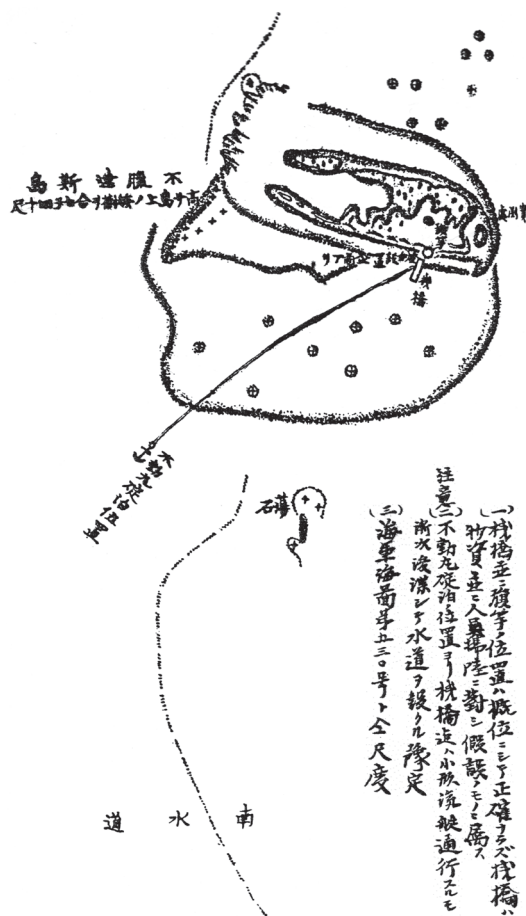


図3 東沙島とその周辺  
台湾総督府『プラタス島視察報告』の付図  
(図中の注意書きは移動させている)

し、甲羅1斤につき25円を得た。

鳥類：鳥の種類は少ないが、カツオドリが南北の両浜に群棲し、その数は2~3万羽に達する。捕獲は雛鳥から親鳥に成長する6~8月に行い、人を恐れないため容易である。食用にも利用できるが、現在は羽毛の採取のみを行い、その価格は7段階に分けられる。綿毛と呼ばれる羽毛が最高級とされ、羽毛100斤(60kg)で55円となる。最安値の羽毛は18円である。平均して鳥1羽から取れる羽毛は15銭で、羽は5~6銭である。最高級の綿毛は1,500羽から100斤しか取れない。

表2 1908年西澤島の人口構成

人 口 構 成		人 数
内 地 人		220
(内 訳)	労働者	164
	事務員	10
	医 師	2
	分折係	2
	婦 人	25
	子 供	17
台 湾・福 建 労 働 者		204
合 計		424

(「プラタス島視察報告」より作成)

リン鉱・鳥糞(グアノ)：同島のリン鉱は、鳥類の排出物が分解され、地中の石灰岩と化合して生成されたもので褐色の塊状のものが良質であり、黄色の砂状のものは質が悪い。同島で採掘の価値があるリン鉱は、島の東側の元濱の15万坪に限定される。また、リン鉱層は厚さ30cm程度で埋蔵量は少なく、島全体で18万トン程度と推定される。その3分の1がリン鉱で残りの3分の2はグアノで占められ、リン鉱も他の産地のものと比べるとリン酸が少なく品位が低い(阿曾, 1940)。調査した技師は、リン鉱埋蔵量18万トンのうち、実際、採取可能なリン鉱を14.2万トンと見積り、以下のような収支計算を試算している。西澤島から台湾の高雄までリン鉱を搬送して売却した場合、内地のリン鉱相場を参考にすると、リン鉱1トンあたり11円39銭の売値となる。同島での採掘費と高雄までの運搬費が5円67銭として、売値から、これらの費用を引くと5円72銭が粗利益である。これに採掘可能なリン鉱量14.2万トンを掛けると81万2530円となる。これが同島の全リン鉱を掘りつくして売却した利益なのである。コストは採掘や輸送費だけではない。島の開発に多額の費用をかけ、1年間だけで30万円を投下しており、到底、割の合う事業ではない。加えて金融界の不況のありで肥料会社は生産量を落としており、同島に

はリン鉱1,000トン、グアノ1,100トンが貯蔵されたままであった。

設備・労働者：西澤はわずか10ヵ月間に棧橋や軽便鉄道、宿舍や倉庫など18棟を建設し、棧橋と事務所間には電話線も架設した。海上輸送には団平船9隻、小型蒸気船1隻を備え、船舶は30隻もあった。1908年6月の人口は424人であり、その内訳は表2の如くである。内地人とあるのは八丈島、小笠原島、沖縄からであり、これらの人々は主に漁業や水夫、大工、鍛冶などに従事した。台湾や澎湖島、福建などからの労働者の仕事は、リン鉱採掘であった。労働者の生活は朝4時の起床から始まるが、時間にはほら貝を吹き鳴らし軍隊式に行われた。就業は朝5時から始まり、終業は18時25分であった。この間4回の休憩があり、11時30分からの休憩は昼休みを挟んで3時までと、暑さ対策のためか長時間設けられていた。就業時間は9時間であり、就寝は夜の9時頃であった。

賃金は日給制で35～70銭で平均では50銭ぐらいであり、婦人は20～30銭、子供の手伝いは4～5銭であった。採貝や漁業の場合は採取した出来高払いであり、高瀬貝は1個5厘、タイマイはその質によって1頭50銭から5円までと差が大きかった。なお、内地人に限ってこれ以外に月給10円を給与している。これらの賃金は1908年1月より、毎月10日に前述した引換券(金券)で支払われた。給与の2割は強制的な貯蓄の義務が課せられ、その利息は郵便貯金と同率であった。

以上、「不臘達斯島視察報文」から概要を摘出したが、続く「プラタス島燐鉱調査報告」では、リン鉱の鉱量や品位の分析を掲載している。それによると調査した技師は、同島のリン鉱はリン酸分が少なく、石灰分が多いので過リン酸肥料の製造は無理であり、リンとチッソの配合肥料を製造すべきで、その工場を台湾の高雄に建設することを



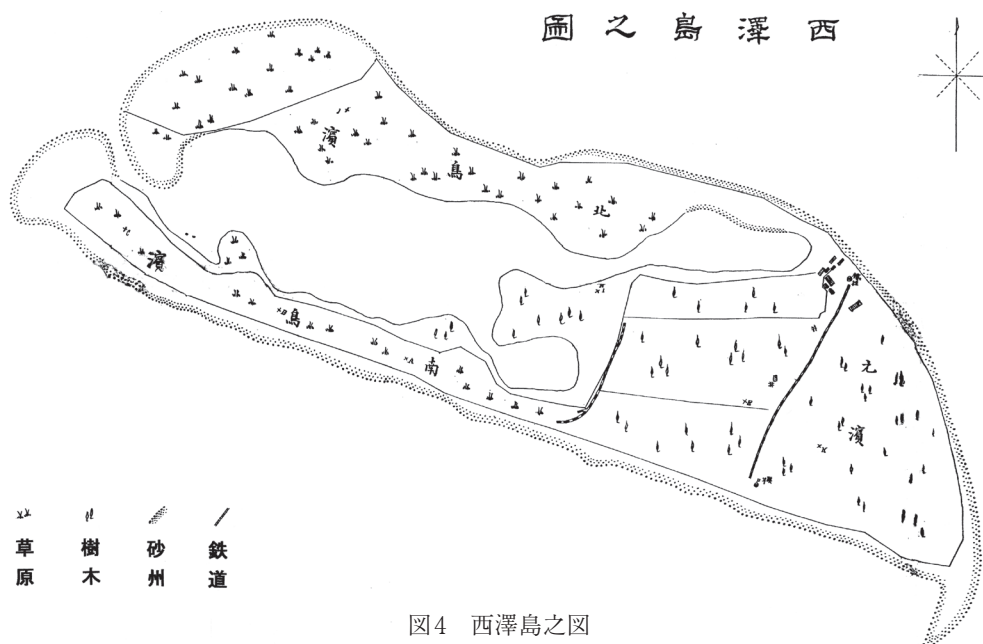


図4 西澤島之図  
台湾総督府『プラタス島視察報告』の付図  
(現図は縮尺が入っているが、縮小率不明のため除外した)

提言している。さらに西澤の計画していた大きな工場建設は無謀であること、また、リン鉱の原価を低く見積もっていると指摘している。

わずか1.74km<sup>2</sup>の島で、想定されたリン鉱床が厚さ30cmたらずということから考えても、西澤が行った投資は過大であった。かつ貝類や鳥類捕獲という略奪的な採取では継続的な事業になりえないのは明かであり、西澤が島の資源量をどのように考えていたのかは不明である。

#### IV 西澤島事件とその顛末

##### 1. 西澤島事件の発生と対日ボイコット運動

西澤島の事業が3年目に入った1909（明治42）年3月10日、東京朝日新聞は上海特派員からの「恐らく訛伝」という記事を掲載した。漢字新聞「時報」の香港電報によれば「一百余名の日本人 俄然広東省湖州の漁村 東沙に現れ漁船を追い払い、日本国旗を同村に建てたり、右につき広東総督は

調査の為め官吏を派遣したり」とあり、この報道は訛伝ではなく、まさに西澤島のことであった。以後、西澤島問題は7ヵ月間にわたって新聞紙上ににぎわすことになる。

続く3月14日には同じく上海特派員が時報の続報を以下のように伝えた。

##### 日本人 漁村占領

東沙は香港を距る百余哩に位し、広東省湖州府の管轄内にあり、然るに昨年多数の日本人ジャンク船にて来着し清国漁船を追退け、島内の清国神社を破壊し自ら家屋を造り、日本国旗を掲げ、硫黄事業に従事して已に百万\$以上の収益を得たり。目下、日本人三十名、台湾人四、五十名居住し居れり…

とあり、ジャンク船や百万ドル以上の収益などは事実誤認であるが、間違いなく西澤島のことであった。

広東政府は再調査をするとし、北京中央政府に

対して日本人が東沙島で中国人漁夫を駆逐占領し、これを西澤島と称していることを報告した。これを受けて「南洋水師提督は東沙島に軍艦を急派し」「時節柄、排日感情に影響する所勘少なるざるべし」と東京朝日新聞は報じ、さらに同新聞は3月20日「石澤（西澤）<sup>18)</sup> 某が広東所属のプラタス島を占領せしとの重要な問題になりて、当地官民の注意を惹きボイコット再燃の企てあり」と伝えた。

西澤によって開始された事業が、3年後に領土問題化したのである。新聞記事にある「時節柄排日感情」とか「ボイコットの再燃」とは、前年（1908）に中国南部を中心に吹き荒れた日本商品ボイコット運動のことである。事の発端は、武器を搭載した日本船「第二辰丸」が、マカオ沖で中国軍艦に密輸容疑で拿捕、抑留されたが、日本は清に対して強硬に交渉し、賠償と謝罪を認めさせ解決した。だが、これに不満を持った広東の民衆は、3月になって「国恥記念大会」を開催、これを契機に排日運動が激化し（吉澤，2004）、この運動は中国国内ばかりでなく国外にも及び、不況下の日本経済に大打撃を与えた（菊池，1972）。

排日運動は年末近くになり下火になったものの辰丸事件の賠償金は支払われず、ボイコットの余波は続いていた。翌年の3月8日には国恥記念大会の1周年大会が開催されたが、在広東日本領事の瀬川浅之助は小村外務大臣に宛て

本月八日自治会記念大会ノ結果ニ依リ、或ハ排貨熱ヲ再燃スルコトナキヤヲ密カニ憂慮シ居リタリシニ、其後、澳門境界問題ト仏山事件ニ対スル運動ハ益々盛ナル模様アルモ…（略）…今後、清国ノ人心ヲ甚タシク刺激スベキ事件ノ新タニ発生セザル限りハ、広東ノ日貨排斥熱ハ自治会員ノ運動ノミニテハ断シテ再発スルノ憂ナキモノト信ス<sup>19)</sup>

と楽観的な報告をしている。しかし、すでに新た

な火種となる西澤島問題が起っていた。自治会大会の運動方向が、マカオとの境界問題など対ポルトガル非難で盛り上がるなか、東沙島（西澤島）問題についても、次のような議決がされていたのである。

- (1) 速やかに之を内外の同胞に知らしめ、一致の歩調を取る事
- (2) 政府に稟申し、我国漁業及該島の財産を保護せしむる事
- (3) 政府若し之を放任する時は、国民の力を以て之の挽回を計る事

と(3)では領土回復運動を提唱した。このため対日ボイコットの拡大の不安から、日本との貿易を控えた横浜の海産物市場は、一時混乱し、フカひれや灰鮑の価格が暴落した。

この対日ボイコット運動は「兵力を費さずして戦いに勝つ法なり」<sup>20)</sup>として、運動を緩めれば、日本は間島<sup>21)</sup>に満足せず、その支配は東沙島に及ぶとし、運動が後退するようなことになれば日本は中国を侵略するであろうと警告した。このような動きに対して、対日ボイコットで大きな痛手を受けた日本政府は直ちに対応し、これまでプラタス（東沙）島は無所属の島嶼と考えてきたが、同島を日本領としたこともなく、清の領有の確証が得られるならば領有権を承認することは躊躇しないと表明した<sup>22)</sup>。

## 2. 欧米列国の把握と清の対応

プラタス（東沙）島は無入島とはいえ、中国南部の漁民の季節的な出漁もあり、西澤による大規模な開発「西澤島」の建設は、日清間の領土問題に発展する気配があった。これを裏付けるように、西澤がプラタス島に上陸して1ヵ月後の1907（明治40）年9月7日付読売新聞は、「西澤島と米国<sup>ワシントン</sup>」というタイトルで「華盛頓政府は、日本人が香港<sup>ルソン</sup>と呂宋の間に在るプラタス島を占領したることに

つき、別に掛念する所なく、米国は同島に対し、何等の権利も主張せずと宣明せり」とアメリカ政府は同島に関わらないと報道した。さらに10月22日付台湾日々新報が伝えるところによると、ロシアのオデッサ新聞が、

小なる日本が露国との戦いにより、一大飛躍をなしたるの一事は、各種の方面に於いて其国民の虚栄心を増長せしめ屢次政治的愚挙を誘致せり、…（略）…南洋協会の西澤某は台湾海峡南方のプラタス島に日本国旗を掲げ、自ら西澤島と称したる由なるが、政府はこれに何らの干渉を試みずと吾人にして日本政府に忠告するの権利ありとせば、日本政府は速に斯の如き個人の政治的野心輕舉を嚴重に取り締るを可とすと言はんと欲す<sup>23)</sup>。

と日本政府を批判した。西澤の上陸からわずか1～2ヵ月後にはアメリカ、ロシアとも、この小さな島の動向を把握していたのである。翌1908年には英米両国が共同して広東政府に対して汽船の航行上、同島に灯台を建設することを要請している。

だが、当事国である清は、西澤島の経営が3年目になるのに、これまで何ら日本に異議を唱えたこともなく、台湾日々新報は、今さら、どうしてという論理で「若し南清官民が今の今まで之を知らざりしとせば、其の吞気さ加減呆然たるの外なく…<sup>24)</sup>」と問題発生後、連日、強硬な主張を交えながら西澤島事件として報道した。

事件に対する清の対応については、1932（昭和7）年になって「広東晨报」に「東沙島ヲ説キテ西沙島ニ及ブ」という記事が連載された。この記事は事件に対しての清側の主張が述べられており、この全文を在広東日本総領事代理の須磨弥吉郎が訳出し、その要旨が外務省機密文書に収録されている<sup>25)</sup>。これによると、当初、清国外務部の対応は早く、西澤の上陸41日後の1907年9月23日

には、江蘇、広東の両総督に対して西澤島の調査を命じた。これに対して江蘇総督の端方の対応は遅く、その回答は日本人が占拠した島は北緯14～18度間とするが、中国地図のみならず、英国海軍の海図にも記載なしとし、北緯15度10分、東経117度40分には小さな岩礁があったが、これとは付合しない。日本との交渉は清国領土である確証が必要であり、まず、外務部が航海者や地理学者から領土の確証を得てから、軍艦などを派遣すべしとした。その後も島の特定を巡って検討し、香港から東南170海哩の地点に「碧列位」という砂質の島があり、西に港があり、毎年、漁船が避難することが多いが、この島も緯度、経度が合わないとして西澤島ではないと報告したが、実際は西澤島のことであった。また、同じく清国外務部から命令を受けた広東当局は、香港から離れること3海哩に水深が深く大型船の停泊に優れた島があり、一時、ドイツが軍港にしようとしたがイギリスに阻まれ、中国海軍も、これを検討したが実現しなかった。多分、日本人が占領した島はこの島のことであろうとし、この島以外は日本人にとって価値がある島はないと報告した。

このように日本人による島の占拠について、清国政府は西澤島の位置さえも確認しないまま問題が放置された。これについて新聞に東沙島の記事を連載した李霞挙は、如何に清朝の官吏が無能であったか、日本の新聞が西澤島の占領を競って報道しているにもかかわらず、清朝は島さえ知ることなかったと、政府の腐敗ぶりを嘆いた。

ただ、この時期、清は滅亡寸前で中央政府のコントロールは失われ、地方では農民などによる暴動が多発していた。このように国内情勢が緊迫化するなかで、地方政府は日本人の無人島占拠については、これに対応する余裕もなかったのではないかと考えられる。だが、辰丸事件を契機に対日ボイコット運動が盛り上がるなか、中国ナショナ

リズムの利権回収運動が拡大するに伴い、新たに西澤島が事件として俎上に挙げたのである。

### 3. 賠償交渉－西澤島消滅へ

西澤島事件は、西澤が島に上陸して3年目の1909年2月に起こった。事件は、その前年(1908)に多くの日本人が来島し、食料を貯蔵していた大王廟を破壊、6隻の中国漁船に損傷を負わせ、中国漁民を同島から退去させ、また、1909年1月にも中国漁船が追い払われたというものであり、これらの漁民が、広東総督に生業の回復や廟や漁船などの損害賠償を求めたことによる<sup>26)</sup>。

これを受けた清の南洋大臣は、軍艦「飛鷹」を広東に派遣し、同艦は同年2月11日に西澤島に到着した。島には日章旗が掲げられ、日本人、台湾人がそれぞれ数十人居住し、商店、倉庫、宿舍などの家屋が林立し、棧橋、鉄道が建設されていたことなどを確認した。軍艦から報告を受けた広東総督は、さらに税関船を2月18日に西澤島に派遣し聞き取り調査を行った。香港に帰港後、同島から退去させられた漁民からも事情を聴取し、これらの資料を以て日本領事と交渉した。これによって日本人の東沙島占拠は、西澤島事件として広く中国国内で流布することとなった<sup>27)</sup>。

この清国政府の動きに対して、前述したように日本政府の対応は早く、同島は無所属と認識していたが、清の領有の確証があれば承認するとし、ただ、無所属の状況で置かれた島で事業を開始した西澤に対しては保護を与えるべきと表明した。日本政府は同島の問題については、対日ボイコットを抱えるため慎重な姿勢で対応していたが、新聞各紙は西澤のプラタス島上陸以後は、新領土発見として「西澤島」と報道する新聞も多かった。とくに台湾日々新報は、一貫して西澤島の呼称を使用し報道を続けた。

早期解決が図られそうであった状況は一変し、

1909年4月以降、西澤島事件について新聞各紙は強硬な論調が目立ち、4月1日の読売新聞は「日本政府また之を認知して、其採鉱事業を許容したりとせば堂々たる天朝は故なく、日章旗を撤退すべからず。故なく其臣民をして占有の権を放棄せしむべからず」と主張し、また、21日の東京朝日新聞も、清の抗議によりその領土を認め、西澤の投下した資金を賠償という形で決着すれば「確かに譲歩の意を表するに外ならず、由来南清に於ける我外交の失敗は、将来の施設上大に憂ふべき悪影響を来すに至るべし」との論評を掲載した。

だが、日本政府は当初より落とし所を探っていた。前年(1908)、対清強硬外交を展開し、辰丸事件により17万円余の賠償金を得たにもかかわらず、清国からの支払いの時期の見通しもなく、中国南部から広がった対日ボイコット運動によって、日本商品は大打撃を受けた。日本から清国向けの輸出は、1908年には前年比で30%、香港向けは24%激減した。日本からの全世界への輸出総額は1907年に4億3,241万円であったが、翌1908年には3億7,825万円と5,416万円減少したのである(神原, 1935)。船舶関係では日本郵船と東洋汽船の2社だけで、その損害額が120万円に上った<sup>28)</sup>。この両社の香港支店長が日本領事館の瀬川領事に会い、その要望が小村外務大臣宛に以下のように上申された。

…清国人ハ最初ヨリ同事件ヲ以テ非常ニ屈辱ト信シ居ルカ故ニ、此上賠償金ヲ負担スルコトハ絶対ニ好マサル色アリ。又「プラタス」問題ニ付テモ新聞紙上ノ報道ニ依リ、日本ノ要求甚タ過大ナルカ如ク信シ居ルカ故ニ、此二問題ヲシテ満足ニ解決セサル限りハ到底船舶ニ対スル「ボイコット」ノ終息ハ望ナキカ如シ。「プラタス」問題ノ如キモ此際可成公平ナル解決ヲ見ルニ至ランコトヲ望ムト、元来、香港在住本邦人ノ多数ハ辰丸事件ノ内情ヲモ熟知シ居ルカ故



ニ、寧口船主対スル同情ハ甚タ薄ク、且ツ今回ノ「プラタス」事件ニ付テモ西澤ノ現状ヲ触リ承知シ居ルカ故ニ、帝国政府ニ於テ単ニ西澤及辰丸船主ノ保護上ニ重キヲ置キ、其結果却テ清人ノ感情ヲ害ス、延ヒテ南清地方「ボイコット」終息ノ期ナキニ至ランコトヲ想シ…<sup>29)</sup>

と現地の苦境から、2つの事件に固執するべきでないと訴えたのであった。

日清両政府の交渉は膠着状態が続いた。清側の主張は、西澤島は本来、清の領土であり、西澤が数年間リン鉱採掘などの事業を行ったため損害を被ったとして賠償要求したのに対し、日本側は清の領有権を認めたくて、無人島であった島を西澤が善意的な事業を行ったものであり、個人財産として賠償を求めるというものであった。

清国における対日ボイコット運動の拡大の兆しや、民族資本の勃興、さらに外国から利権を取り戻す「利権回収運動」が展開するなか、中国のナショナリズムは高揚を見せており、西澤島問題の交渉は清側に有利であった。

1909年6月6日付の東京朝日新聞は「西澤島と排日」を掲載し、「東洋は云ふまでもなく、米豪各地の清商が根気よくも日本に対し排貨、排船を続行するその影響は、意外に深大なるものあり」とし、西澤島事件によって排日運動が刺激されており、シンガポールの華僑は同島の問題を掲げて対日ボイコットの継続を主張していると報道した。さらに辰丸事件の賠償金17万円の放棄が取りざたされるなか、「我外務当局は年々数百万円の商利を犠牲にとするも、尚、西澤島、辰丸両損害要償に固執すべきか、將た粉々たる子理屈を踏み潰して1日も早く商戦上の利益を擁護せんとするか、今後、内外人の間に監視焦点たるべしと云えり」と論評した。日本としては、もはや賠償金どころの問題ではなくなっていたのである。

6月中旬になって西澤島事件の解決案が浮上し

た。それは日本側が西澤島を清の領土として認め、同島から西澤が撤退し、清側が西澤の事業を買い上げるというものであった。そのため西澤島の財産を評価する委員として、清は広東洋務局の魏潮を、日本は在広東日本領事館の瀬川浅之助を任命し、7月18日同島で両者による調査が行われるため、日本側は軍艦「明石」（艦長：鈴木貫太郎）、「音羽」（艦長：秋山真之）を派遣した<sup>30)</sup>。翌19日の東京朝日新聞は「西澤島の最近報」で「無尽蔵の燐鉱石のみにて一箇年十八万円、其他鉦用具殻、鼈甲、海草、魚類等副産物の収穫を加ふれば年々三四十万円は優に収穫するを疑はず…」と同島の評価価格を上げるような報道を行った。

交渉の焦点は西澤の事業の評価額に移り、日本は西澤のこれまでの投資額50万円を賠償の基礎に置こうとしたが、清の主張は、本来、中国領である同島で日本人が多額の投資を行ったことは関知する由もないとの主張であり、どう見ても日本側が不利であった。日本側の新聞も強硬な論調は少なくなり、清側の主張に対して反論する材料も少ないと報道した<sup>31)</sup>。このような状況下、広東総督の張人駿は両江総督に転任し、後任の袁樹勸が就任し10月になって以下の交渉が成立した（外務省、1923）。

「プラタス」島引渡ニ関スル取極

明治四十二年十月十一日調印

- 一、清国ニ於テプラタス島ニ在ル西澤ノ事業ヲ買収スル価格ハ広東銀拾六萬元ト定ム
- 二、西澤ヨリ清国に交付スベキ漁船廟宇税金等ニ関スル諸款ハ広東銀參萬元ト定ム
- 三、清国ハ西澤カ其物事並ニ採掘セル燐鉱ヲ 前キニ提出セル目録ニ照ラシ 清国委員ニ引渡シタル後 半月以内ニ事業買収価額ヲ在広東日本領事ニ交付スヘシ

以上取極書ハ日漢文各式通ヲ作り 互ニ記名調印ノ上 日漢文各壹通ヲ保存シ以テ證據ト為ス

大日本国広東駐在総領事代理 瀬川浅之助 印大  
清国署理両広総督 袁 樹 勸 印

大日本明治四十二年十月十一日

大清国宣統元年八月二十八日

清による西澤の事業の買収金額は広東銀で16万元であり、同島は清国領と日清両国が合意したことから、清は西澤に対して3万元の税金を追徴した。それを差し引くと西澤の得た賠償金は13万元、日本円で約10万円であった(Heinzig.D, 1976)。これまでの西澤の投資額50万円からは、かけ離れた回収額になった。西澤の経営については、リン鉱やグアノの埋蔵量、貝や鳥資源からして過剰投資は明らかであった。ただ、合意後、西澤はこの資金をもって3つの無人島の開拓に乗り出すとの談話を発表し、その1つに大東諸島のラサ島があった(南, 1909)。

日清両国の代表による同島の引き渡しの調印が終わった翌々日の10月13日の台湾日々新報は、これまでの強硬な論調から一変した論評の「…西澤島たるや元と是れ南海の一孤島に過ぎず、燐鉱の富も亦た大なる価値あるにあらず…」とし、さらに「我当局が大局の前の小事に拘々せざりしことの頗る機宜に適したるを思う」という記事を掲載した。これまでの強硬な論評は影をひそめたのである。

## V. おわりに

明治後期、日本人の太平洋の島々への進出目的が、アホウドリなどの鳥類捕獲から鳥糞(グアノ)・リン鉱採取に移った事例として、南シナ海の東沙島を取り上げ、その歴史的展開を中心に考察した。その結果を要約すると以下の通りである。

東沙島の情報については、明治直前、八丈島民の漂着事件があり、同島のことが八丈島内外に伝わっていたと考えられ、そのことが1901年の玉置半右衛門や水谷新六の東沙島探検に繋がったと想

定する。だが、探検目的であったアホウドリは存在せず、玉置はすぐに進出を断念した。水谷も同様に断念したが、6年後、今度はカツオドリの捕獲を目的に同島に進出したが遭難し失敗した。この段階まで進出の行為目的は、アホウドリなどの鳥類の捕獲であったと言える。

1907(明治40)年8月、水谷と入れ代わるように東沙島に進出したのが、台湾在住で八丈島で療養生活を送ったことのある西澤吉治であった。その進出目的は、当初は鳥類の捕獲を企図していたが、鳥糞(グアノ)やリン鉱、貝類の採取も視野に入れており、輸送手段として大型汽船を使用した。この時期、すなわち1907年頃から無人島への進出の行為目的が、軽量のアホウドリなどの鳥類から、重量のあるグアノ・リン鉱へと変化するのである。

また、大量の労働者を投入するなど過大とも思われる生産体制を構築、多くの労働者を八丈島、沖縄、台湾、福建などから導入し、絶海の無人島が、一躍、略奪的な生産を行う企業(会社)島の「西澤島」へと変貌した。さらに島内でしか通用しない私的紙幣を発行するなど、一企業が独占的に占有する single-enterprise-island の端緒の性格も帯びていたことが指摘できる。

西澤が事業を始めて3年目の1909年3月、突如、同島をめぐる日清間に領土紛争、西澤島事件が起こった。前年の辰丸事件を契機に対日ボイコット運動が高揚を見せたなか、中国のナショナリズムの利権回復運動が拡大するに伴い、西澤島が事件として俎上に挙がったと言える。日本政府は対日ボイコット運動により大きな痛手を受けたこともあり、西澤島については慎重に対応し、日本が同島を領有したことはないとして早々に清の領有を認めた。このため日清間の交渉の焦点は、西澤の資産処分に絞られ、同年10月、清側が約10万円以西澤島の事業を買収することで決着した。ここ

において企業島、西澤島は消滅し東沙島に戻ったのである。

### 〈付 記〉

西澤吉治については、孫にあたる茅ヶ崎市在住の松丸耕作氏より、長年にわたりいろいろご教示いただいております、ここに厚く感謝申し上げます。また、英文要旨は、明治大学文学部（日本学術振興会特別研究員 PD）の久保倫子氏に作成いただき、製図については、筑波大学大学院生（日本学術振興会特別研究員 DC1）の橋本操氏にお世話になった。ここに心よりお礼申し上げます。

### 注

- 1) アホウドリは馬鹿鳥（バカ鳥）、信天翁（舜天翁）、藤九郎、シラブ、沖の太夫などと呼ばれる翼長2mに及ぶ大型の海鳥。無人島に季節的に生息し、人を恐れないこと、さらに飛び立つのに滑走が必要なことから、撲殺によって簡単に捕獲され、その羽毛や羽はヨーロッパ、特にフランスに輸出され高値で売却された。
- 2) アメリカの歴史家ジミー・スグスが、アメリカ人の鳥糞（グアノ）を求めてのすさまじい太平洋への進出を「グアノ・ラッシュ」と定義したのに対し、筆者は日本人の太平洋への進出を「バード・ラッシュ」と定義した。
- 3) 東沙島は欧米製海図などではプラタス島とも記載され、西澤島は西澤が事業化してから日本の新聞が使用した呼称であり、本稿では3つの島の呼称をそれぞれの文意の中で使い分けて用いる。
- 4) 文中のタバノ木とあるのは、ウドノ木のことである（川上, 1909）。
- 5) 東京都公文書館所蔵。
- 6) 全長60～90cm、翼長130～150cm、全身が黒褐色の羽毛で覆われ、別名オサドリと呼ばれる。熱帯から亜熱帯に広く分布し、英語ではガネット（gannet）と呼ばれることもある。
- 7) 東京朝日新聞1907年8月31日付「南洋の新領土 探検先鞭者」。
- 8) 桑名市在住の大塚由良美氏よりの提供された資料による。
- 9) 全長50cm、翼長1m程度の鳥で捕獲が簡単なこともあり、羽毛採取のため京都府の冠島や北海道の渡島大島などでは大量に乱獲された。
- 10) 前掲8)と台湾日々新報1907年6月26日付「プラタス探検漂流奇談（上・下）」による。
- 11) 東京朝日新聞1903年7月5日付、琉球新報同年7月19日付「澎湖列島大猫島の事業」。
- 12) 茅ヶ崎市在住の松丸耕作氏の作成資料による。
- 13) 南海タイムズ2001年7月27日付「特別寄稿—西沢隆二」。
- 14) 読売新聞1907年8月30日付「南洋の新領土発見」。
- 15) 台湾日々新報1907年10月13日付「西澤島事業と汽船廻航」。
- 16) 大東島では、玉置商会時代から物品交換券という金券が紙幣代わりに流通しており、その後、経営が東洋製糖、大日本製糖に代わったが引き続き会社発行の紙幣が使用された。
- 17) 東京朝日新聞1909年3月27日付「西澤島と総督府」の記事の中に「資金四十余万円を投入せり、一時は四百人の職工を使用せしことありしが、其結果余り面白からず、幾んど失敗に帰せしかの観あれども…」とある。
- 18) 明らかな誤植とみなして（西澤）を入れた。
- 19) 外務省外交資料館所蔵、外務省記録「第二辰丸抑留に関する日清交渉一件」所収文書。
- 20) 東京朝日新聞1909年3月22日付「排日運動」。
- 21) 間島は現在の中国東北部吉林省。古くから朝鮮族が居住し、清と朝鮮との間で紛争が絶えなかったが、日露戦争後、朝鮮を保護国とした日本も1907年にこの地域に進出を図ったことで日清間に緊張が高まった。
- 22) 東京朝日新聞1909年3月23日付「西澤島の所屬」。
- 23) 台湾日々新報1907年10月22日付「西澤島と露国新聞」。
- 24) 台湾日々新報1909年3月26日付「西澤島事件」。
- 25) 外務省外交資料館所蔵、外務省記録「各国領土発見及帰属関係雑件、南支那海諸礁島帰属関係 二」に所収の「東沙島ヲ説キテ西沙島ニ及ブ」訳報による。
- 26) 前掲25)による。
- 27) 前掲25)による。
- 28) 東京朝日新聞1907年6月6日付「西澤島と排日」。
- 29) 前掲19)に所収の「日本汽船ニ対スルボイコットニ付報告」による。
- 30) 台湾日々新報1909年7月9日付「音羽の西澤島行」。
- 31) 東京朝日新聞1909年8月14日付「プラタス島経過（長崎）」。

### 文 献

- 阿曾八和太（1940）：『燐鉱』丸善。  
 伊勢勝蔵（1948）：東沙島＝西澤島－プラタス・アイランド．中央公論，1948年8月号，270-277。  
 浦野起史（1997）：『南海諸島国際紛争史』刀水書院。  
 岡山重次郎（1910）：西澤島発見談．探検世界，8(4)，

- 34-37.
- 外務省条約局編 (1923) : 『日支間並支那ニ関スル日本及他国間ノ条約』外務省.
- 片岡千賀之 (1991) : 『南洋の日本人漁業』同文館出版.
- 川上瀧弥 (1909) : 西澤島 (プラタス島) の植物, 台湾時報, **1**, 40-43.
- 神原周平 (1935) : 『日本貿易精覧』東洋経済新報社.
- 菊池貴晴 (1972) : 『増補 中国民族運動の基本構造 - 対外ボイコットの研究』汲古書院.
- 司馬遼太郎 (1983) : 『ひとびとの聲音』(中公文庫) 中央公論.
- 台湾総督府技師福留喜之助 (1908) : 『プラタス島視察報告』台湾総督府.
- 東京地学協会 (1907a) : 邦人の支那海孤島探検. 地学雑誌, **225**, 689-690.
- 東京地学協会 (1907b) : プラタス島の沿革. 地学雑誌, **226**, 760-761.
- 東京都八丈島八丈町教育委員会編 (1973) : 『八丈島誌』八丈島誌編集委員会.
- 東京肥料史刊行会編 (1945) : 『東京肥料史』東京肥料史刊行会.
- 菜花野人 (1909) : プラタス島事件及び其の経営者. 実業世界, **3**(19), 40-45.
- 野口武徳 (1972) : 『沖縄池間島民俗誌』未来社.
- 平岡昭利 (2003) : 南鳥島の領有と経営 - アホウドリから鳥糞・リン鉱採取へ. 歴史地理学, **215**, 1-14.
- 平岡昭利 (2005a) : 明治期における尖閣諸島への日本人の進出と古賀辰四郎. 人文地理, **57**(5), 503-518.
- 平岡昭利編 (2005b) : 『離島研究Ⅱ』海青社.
- 平岡昭利 (2006) : 明治期における北西ハワイ諸島への日本人の進出と主権問題. 歴史地理学, **231**, 19-29.
- 平岡昭利 (2007) : 北西ハワイ諸島における1904年前後の鳥類密猟事件 - バード・ラッシュの一コマ, 『下関市立大学創立50周年記念論文集』139-147.
- 平岡昭利 (2008a) : 明治末期 北西ハワイ諸島における日本人による鳥類密猟事件 - バード・ラッシュの一コマ, 下関市立大学論集, **51**(1)(2)(3), 71-77.
- 平岡昭利 (2008b) : アホウドリと「帝国」日本の拡大. 地理空間, **1**(1), 53-70.
- 平岡昭利編 (2010) : 『離島研究Ⅳ』海青社.
- 松永秀夫 (1995) : 幕末最後の漂流顛末 - 香港で厚遇された八丈島島民 -. 石井謙次郎編『日本海軍史の諸問題 - 対外関係編』文献出版, 217-259.
- 南 生 (1909) : 西澤島事件の主人公 更に琉球の無人島に着眼す. 商工世界, **8**(17), 107-109.
- 村瀬次郎 (1909) : プラタス島状況. 薬学雑誌, **330**, 969-975.
- 山下太郎 (1939) : 東沙島の沿革. 台湾時報, **239**, 156-165. **240**, 63-73.
- 山下太郎 (1940) : プラタス島の西沢氏後日譚. 台湾時報, **243**, 122-130.
- 吉澤誠一郎 (2004) : 第二辰丸事件 (1908年) とその地域的背景. 史潮, 新**55**, 26-46.
- Culliney, J. L. (1988) : *Island in a Far Sea- Nature and Man in Hawaii*, Sierra Club Books.
- Heinig, D. (1976) : *Disputed Islands in the South China Sea*, Otto Harrassowitz.



## **The Advancement of Japanese to the Pratas Island and the Nishizawa-island Incident**

HIRAOKA Akitoshi

Faculty of Economics, Shimonoseki City University

In the Meiji era, the Japanese rushed into the Pacific Ocean islands in order to gain the feather of birds such as albatross. This study examined the Japanese exploring to the Pratas Island in the South China Sea. The first exploring to the Pratas Island was conducted by Hanuemon Tamaoki and Shinroku Mizutani in 1901, and they aimed to gain albatross feather. However, there was no albatross in the island, then Tamaoki abandoned his plan immediately. Mizutani tried in vain to find *Sula leucogaster*. Secondly, Kichiji Nishizawa explored the island in order to gain not only birds' feather but also guano and mineral phosphate; huge labor force was introduced into the island, and the island was transformed into the business island named 'Nishizawa Island'. At this point, the purpose of the exploring of the uninhabited island was dramatically changed from gaining birds' feather into the collection of guano and mineral phosphate. However, in course of time, Nishizawa's business in the island caused a territorial issue called 'Nishizawa-island Incident'; the China's nationalism movement against Japan such as staging a boycott of the Japanese products damaged the Japanese government. The incident was solved by the agreement that the Chinese government purchased Nishizawa's property in the island.

**Key words** : Pratas Island, Nishizawa Island, albatross (feather), guano, mineral phosphate